資料２

第７回鹿野地域振興会議資料	
平成 30 年 1 月 22 日（月）	
担当課	地域振興局地域振興課

新市域振興ビジョン改訂の考え方について

１．概要

「新市域振興ビジョン」は、新市域の１０年先を見据えた地域の特性を生かしたまちづくりの方向性を示すものとして平成２６年８月に策定され、重点的に取り組む必要性のある項目については「推進計画」を作成し、計画的に事業を推進しているところです。

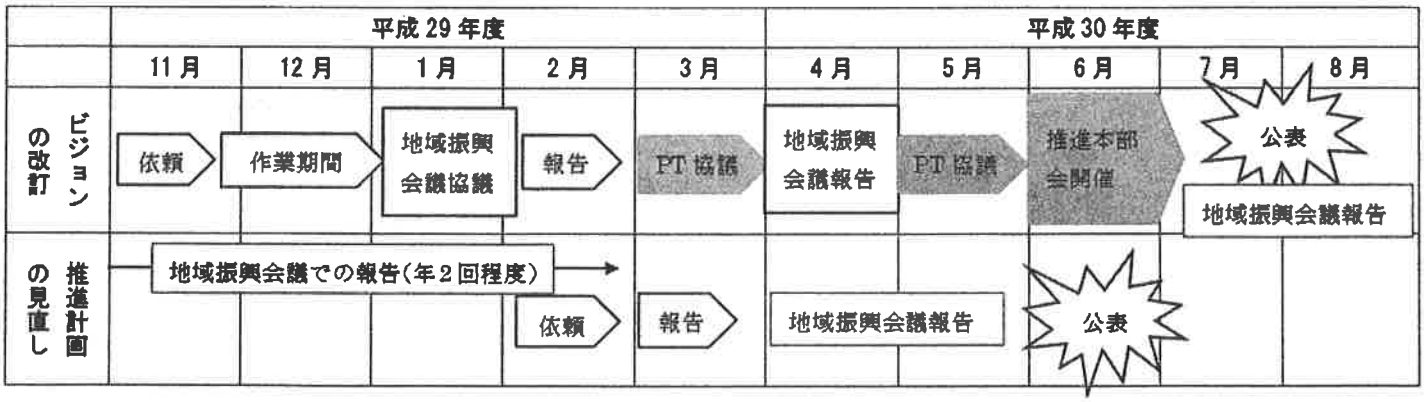
推進期間の短期（２６～２９年度）が経過するにあたり、平成２８年４月に策定された「第１０次鳥取市総合計画」との整合性を図ることにより、当ビジョンの改訂を行うこととします。

２．見直し作業の内容

（１）①ビジョン第２編「５．地域別の現状と課題、目指す将来像」（Ｐ１５～３１）、②参考資料「１．地域の歴史、特性、資源」（Ｐ８１～８８）、③その他必要な箇所においての修正。

（２）推進計画の見直しについては、平成３０年２月頃を予定しています。
（中・長期事業を見据えての変更を予定）

３．今後のスケジュール



鳥取市新市域振興ビジョン

～全市一体となった夢のあるまちづくり～

鳥取市

平成26年8月

目　　次

第1編　はじめに

1.　「鳥取市新市域振興ビジョン」策定の趣旨 …… 1

2.　ビジョンの位置づけ・目標期間・対象地域 …… 4

第2編　現状認識

1.　合併後１０年のまちづくり …… 5

2.　まちづくりの成果 …… ６～ ８

3.　１０年先をめざしたまちづくり …… 9

4.　地域共通の現状と課題、これからのまちづくり …… １０～１４

5.　地域別の現状と課題、めざす将来像 …… １５～３１

国府町、福部町、河原町、用瀬町、佐治町、気高町、鹿野町、青谷町

6.　新たな施策の展開 …… ３２～４８

第3編　夢と希望が持てる鳥取市の発展をめざして

1.　新たな時代へのまちの姿 …… ４９～７９

2.　「鳥取市新市域振興ビジョン」の実現にあたって…… ８０

参考資料

1.　地域の歴史、特性、資源 …… ８１～８８

国府町、福部町、河原町、用瀬町、佐治町、気高町、鹿野町、青谷町

2.　地域審議会のその他の意見・提案 …… ８９～９１

3.　用語解説 …… ９２～９５

（本文中※印の用語を解説）

第1編　はじめに

1．「鳥取市新市域振興ビジョン」策定の趣旨

鳥取市は、平成16年11月1日、周辺8町村の国府町、福部村、河原町、用瀬町、佐治村、気高町、鹿野町、青谷町と合併を行い、山陰初の20万都市・新鳥取市が誕生してから、満10年を迎えました。

合併してこれまで8町（新市域）は、新鳥取市としての一体性の速やかな確立及び住民の福祉の向上等を図るとともに、全市の均衡ある発展に資するよう、「新市まちづくり計画」、「第8次・第9次鳥取市総合計画」を基本に、8つの総合支所が地域振興などの役割を担い、住民とともに地域の「個性」や「魅力」を活かした特色あるまちづくりの実現に取り組むことにより、全市一体的に着実に発展してきました。

しかしながら合併して10年が経ち、時代の潮流は人口減少や少子高齢化の一層の進行による社会構造の変化、地域経済の低迷、環境・エネルギー革新、情報通信の高度化など、新市域を取り巻く社会情勢は大きく変化しています。

これからも全市一体的に、本市の将来像を見据えた着実な発展をめざすため、新市域の魅力と新たな課題を踏まえながらまちづくりの取組を推進していかなければなりません。

「鳥取市新市域振興ビジョン」は、合併10年を契機とし、新たな時代へのまちづくりを前進させ、次の世代へと地域が引き継がれ、大きく未来に「飛躍」していくため、新市域の10年先を見据えた夢のある将来像を描き、行財政基盤の確立や地域振興の継続・発展、協働によるまちづくりの推進など、地域それぞれ特有の「個性」を活かしたまちづくりの方向性を示すものです。

本ビジョンは、「新市まちづくり計画」、「第9次鳥取市総合計画」など、関連計画と整合させて諸事業を推進していきます。

また、総合支所を中心とした地域生活拠点を核とするまちづくりや本市がめざす多極型でコンパクトなまちづくりの実現に向けた取組と整合させたものです。

鳥取市新市域

※人口は平成26年6月30日現在のものです。

５．地域別の現状と課題、めざす将来像

８つの地域は、合併前の町村時代から受け継がれ育まれてきた伝統や文化が「歴史」として残り、また豊かな自然や歴史的な遺産、伝統工芸品や伝統芸能、特徴的な地形や景観など、地域それぞれにさまざまな「特性」と「資源」を数多く有しています。

地域の人口や世帯数の変化、人々の価値観や生活様式が多様化する中、これまで以上に地域の発展を継続していくため、地域の現状を認識し課題を解決しながら、地域の「特性」や「資源」を最大限に活かした魅力あるまちづくりを行うことが重要です。

国府町、福部町、河原町、用瀬町、佐治町、気高町、鹿野町、青谷町の８つの総合支所それぞれが主体となって、「個性」豊かな１０年先の将来像について、次のとおりにまとめました。

◆鹿野町

① 地場産業の振興

高齢化に伴う農業者の減少から耕作放棄地が増加するとともに、景気の低迷により地場産業の衰退が深刻化しています。商工業活性化のためには、人口減少に歯止めをかけることが必要ですが、その対策として企業誘致により就労の場を確保し、若者の県外・市街地への流出防止対策を講じることが重要です。

また、基幹産業である農業は稲作が中心ですが、「未来につなぐ鹿野町農業振興プラン」に基づき、そばの振興、生姜の生産拡大や新規就農者の確保を図るとともに、鳥取市農業再生協議会の水田フル活用ビジョンで特産品目として位置づけた白ネギなどの野菜の作付拡大を進めます。

有害鳥獣駆除により捕獲したイノシシの肉については、「シシボタンの会」との連携による消費拡大を図るとともに、平成 24 年度に整備された食鳥処理施設の有効活用を推進し、鹿野地鶏の生産拡大と普及を図っていくことが必要です。

② 文化・芸術の推進

「鹿野町民音楽祭」、「鳥の演劇祭」などを始めとする文化芸術活動は、子どもから高齢者まで、幅広い世代間交流の中で活発な活動が行われています。

また、「鹿野笠」、「亀井踊り」などの伝統工芸や文化の継承、新たに始まった若者によるアートを通したまちづくり活動などにより、文化・芸術の町としての知名度が高まっています。

文化・芸術の町として更なるアピールをするとともに、年間を通したにぎわいを創出するため、若いアーティストが活動できる環境整備の支援を行うことが必要です。

③ 交流人口の増加

住民自らが地域の魅力づくりに積極的に参画するとともに、本市西部地域の観光情報発信拠点施設「鹿野往来交流館童里夢」の活用により、交流人口の増加に取り組んでいますが、伸び悩んでいる状況にあります。

このような中、多くのまちづくり活動組織との情報の共有を図り、効果的な情報発信や連携した取組によって、人が訪れる魅力あるまちを創出するとともに、国内観光客の誘客と併せ、日本文化体験の受入体制を整備し、海外観光客の誘客に取り組むことも必要です。

このため、本市西部地域の宿泊拠点施設である「国民宿舎山紫苑」の施設改善等を検討するとともに、観光資源として価値の高い神社・仏閣や「山陰海岸ジオパーク※」を活かした広域型観光振興に「鳥取市西いなば地域振興協議会」と連携して取り組み、地域の経済効果を高めていくことが重要です。

④ 移住・定住の促進

少子・高齢化に拍車がかかり、人口減少から集落機能の維持が危ぶまれる状況の中、お試し定住体験施設「しかの宿」、「鬼楽庵」の利活用の推進や、ＮＰＯ法人「いんしゅう鹿野まちづくり協議会」との連携により、積極的にＵＪＩターン※者の受け入れに取り組んでいますが、中山間地域への定住には十分に結びついていません。

年々増加傾向にある空き家の有効活用と支援策について、自治会など地域との情報共有を進め、若者の移住定住を促進し集落維持につなげることが重要です。

⑤ 教育環境の充実

小・中学校の児童・生徒数が年々減少し、鹿野中学校は本市の標準規模(６クラス)を下回る状況となっています。

子どもたちや本町にとって地域の教育がどうあるべきかを総括的に検討する組織「鹿野地域の教育を考える会」で議論を重ねることにより、本町としての方向性を出すことが必要です。

また、日常的に世代間交流を通した学校づくりを行うことにより、安心して子育てができる環境の推進を図っていくことが重要です。

●めざす将来像

誇りを持って住み続けることができる鹿野町、人が訪れてみたくなる鹿野町の実現

温泉と四季の花を通じて人々がふれあい、歴史・文化・人・土のかおりの中で、やすらぎやゆとりを感じることができる「四季“薫るまち”鹿野」を推進します。

また、住民が積極的にまちづくり活動に参画する風土をベースとして、住民と行政の良好な信頼関係を大切にし、ともに汗をかく協働のまちづくりを一層推進することで、さらなる地域の活性化につなげ、住民が誇りを持って住み続けることができる鹿野町、人が訪れてみたくなる鹿野町をめざします。

さらには、住民及び行政がお互いのアイデアを共有し行動につなげることで、鹿野町の地域のブランド力の底上げを図り、元気な鹿野町の実現をめざします。

◇ 鹿野町

鹿野町

●歴史

中世における本町は、因幡地方の軍事・交通上の重要拠点として隣国但馬（山名氏）、出雲（尼子氏）、安芸方面（毛利氏）からの侵入、さらに豊臣秀吉軍の侵入など争奪攻防の的となりましたが、天正９年（１５８１年）鹿野城主・亀井茲矩（かめいこれのり）の登場により平静を得て、その後は城下町、近隣の物産集積地として発展してきました。二代の城主にわたり繁栄してきましたが、元和３年（１６１７年）、茲矩の二男・亀井政矩（かめいまさのり）が津和野に移封（国替え）、また、寛永５年（１６２８年）の鹿野城焼失以降、次第に寂れていきましたが、引き続き、近隣の物産集積地となっていました。

明治１０年に西志加如と東志加如が合併し鹿野村が成立し、明治３２年には町制が施行、昭和３０年には、鹿野町、勝谷村、小鷲河村の１町２か村が合併して「鹿野町」が誕生しました。

●特性

①本町は、因幡の霊峰・鷲峯山（標高９２１メートル）の麓に位置し、地域内を流れる河内川、水谷川、末用川沿いの河岸段丘や扇状地などに集落が形成されています。

②本町の伝説・歴史を題材にした「鹿野ふるさとミュージカル」は、昭和６２年から毎年開催されており、市民参画型の芸術活動として幅広い年齢層によるコミュニティの醸成にも大きく貢献しています。また、国内外から劇団を招へいして開催される「鳥の演劇祭」は、県内外から多くの観客が訪れています。

③基幹産業である農業は、米作を中心にそばの生産振興を図っており、鹿野そば道場などでの提供をはじめ、「そば乾麺」、「そば焼酎」などの加工品の開発も行っています。また、新たな特産品として、「鹿野地鶏」、「因州しし肉」、「生姜」などの生産振興にも取り組んでいます。

④城下町の風情を活かし、４００年続く「鹿野祭り」の似合う街なみの環境整備に取り組むとともに、「四季薫るまち鹿野」をまちづくりの基本理念とし、花いっぱい運動を推進しています。城下町地内には、四季折々の花が植えられた竹プランターを設置し、また、総合支所前の休耕田を活用し、菜の花畑やコスモス畑を創出し、彩のあるまちづくりを展開しています。

●資源

区　分	主なもの
特産品	鹿野そば、そば焼酎「わったいな」、そばアイス、鹿野地鶏、すげ笠、因州しし肉、かりんぼう、イタリアンジェラート、生姜
観　光	鹿野城跡公園、城下町街なみ、鹿野温泉、鷲峯山、鹿野往来交流館「童里夢」、ゆめ本陣、法師が滝、もうけ神社、亀井踊・太鼓、幸盛寺（山中鹿介の墓）、鹿野そば道場、温泉館ホットピア鹿野
イベント	桜まつり、花火大会、鹿野祭り、ふるさとミュージカル、ええもん市、わったいな祭、鹿野往来マラソン、城下町しかのぶらり蓮ウォーク、虚無僧行脚、鳥の演劇祭、週末だけのまちの店、そばの花フェスタ、いんしゅう鹿野盆踊り